

## 食糧

**現地食主義** 海外における探検あるいは調査活動という旅行形式の食糧ということについて、まず念頭に置かなければならないのが、“現地食主義”である。

現実的な問題として、その調達の容易さである。例えば、日本でいかにインスタント・ラーメンが携帯かつ調理に容易であるからといって重い目、高価な目をして現地に持ち込むというのは「島国根性的ナンセンス」なのである。たとえラーメンがなくてもそれにかわる食糧は現地にはいくらでもある。要は順応能力および柔軟性の問題である。

日本あるいは欧米以外での旅行、探検というものは予定通り事が運ぶのはまれであるという事を頭に入れておく必要がある。我が部71年インドネシアのカリマンタン内陸部調査計画における、また今計画における、猫の目の如く変わる現地の状況に愚直かつ充分柔軟に、対応してゆかねばならない。他方、計画の目的の遂行のため、各種装備、医療類はいかなる状況の変化によろうと、量、質ともに信頼のおけるものでなくてはならない。ここにおいて問題はいかに身軽にするかである。

食糧を犠牲にせよというのではない。人間の住んでいる所、地球の至る所には食糧というものがあつた、ただ、いままでの経験からして少々見た目が違っていたり、味が変わってたりするだけなのである。つまり、一つの食事法に固執して、その輸送のための支出およびそれによって生じる他装備への切りつめの波及は、避けねばならない。

さらに現地食主義の最も大きな意義は一つの

文化を舌で感得するということにほかならない。私たち、文化人類学や「調査」ということに関してのアマチュアにとって唯一の武器は、若いがゆえの順応性であり、唯一の方法は「アマゾンの住人たれ」ということであった。

生活様式すなわち文化様式の一つの大きな柱の「食」というものを理解するという事はその文化の一つの断面を見ることになり、文化の感覚的理解のアプローチに他ならない。「人間」を知りに行った人間が、彼らとは全然別な物——彼らからすれば非常にまずいもの——を食べ、それを彼らの前で無神経においしそうに食べるという事は彼らに異和感を与え、なによりも非礼というものである。彼らのこちらに対する理解を妨げると同時にこちら側の彼らの理解の非常な障害となる。

食糧に対する考え方というのは、そのチームの姿勢と基を一にするものであるといえる。

**実際は** アマゾナス地方における一般家庭で広く行なわれている主食としてフェリーナがある。これはマンジョーカをすりつぶし、乾燥させた黄色い粗粉である。これはそのまま食べられ、消化も良いので旅行中、行動中の食糧として重宝なものといえる。これをスープの中に入れて、また時にはそのまま食する。穀物というものは、それぞれの民族が主食にしているくらいだから、最初は「こんなもの」という気になつても、一度慣れてしまうと捨てがたく、現地の芯だらけの米の飯（調理法によるのだろう）などよりは余程、喉を通りやすいというものである。特にその煎りたてのものは、丁度新米の炊きたてに相当する。まさに携帯食とし

てうってつけの世界的傑作食品である。

部落を往復する船の中では、私たちはFUN-AIの居候——食客である。彼らが食糧として持つ主たるものは、やはりファリーナが大部分を占める。その他に、じゃっかんの米、フェジョアード（肉と豆の煮物）のための豆と乾肉、その他若干のカン詰etcである。そして彼らが絶対忘れてはならないものにカフェがある。最後の方になって、カフェが底をついてくると彼らの労働意欲は減退を見せる。これに加えて私たちは部落内での私たちの分の食糧確保のためと、嗜好のため持ち込んだスパゲティやイワシのカン詰やビスケット、クノール・スープ等が供されるのである。

部落への旅程も中ばになると、主食としてのファリーナ、副食としての、カメ、モットン（うずら科の鳥一別名アマゾンのニワトリ）、ピラニアをはじめとする魚類などの“獲物”が確立するのである。すなわち、上流に行くにつれ動物は豊富になってくるのである。

水はもちろん目の前に横たわっているそれなのである。ネグロ河の水質は弱酸性であり、いわゆる水あたりをすることはまずないといえる。私たちは船から身を乗り出して、コップですくい、そのまま飲むのである。また赤道直下の旅行において飲まずにはいられないのである。

ポスト・アジュリカバで船外機付カヌーに乗りかえる。そこでFUNAIから水量が極めて少なく、3日間ほど歩かねばならないという指示が来る。やむなく持込み食糧60kgを40kgに減らす。そのかわり、部落までの一週間のためにと、ポストに豊富なレモンをしこたま積み込む。部落までは水量の少ない、流れの速い川をさかのぼる。このあたりになると、乾期のためあって魚類は豊富で鳥類や獣類も多くなる。

ピララーラ（大ナマズ）やピラニアが多く、ピララーラは重厚でボリュームがあり、本体は水と塩をほりり込み煮る。そしてその頭やピラニアは火であぶるのが美味である。ピラニアはY字形の小骨が多いのが難であるがあっさりしていてタイのようで日本人好みであろう。

このように毎日、ファリーナとベシアーダ（魚スープ）であり、時々それにモットン、野ガモ、野豚などが加わるのである。そういう1週間のカヌーの旅を終えて部落へと入るのである。

部落内での生活は、乾季のため食糧は豊富であったので彼らとほぼ同じものを食べていた。

これは“食”の項にゆずる。

ただ特記すべきは、少ない米を効率的に利用した「イモ粥」が挙げられる。毎日の緊張の中での唯一の楽しみは、やはり食事であり、潤いとしての食品の必要性を痛感するのである。

持ち込んだ食糧は極めて少量で、ほとんどがFUNAIの食糧をあてにした食糧計画であったが、ただ一番問題になるのがビタミン類の確保である。まさに成り行きまかせで、幸いポストでレモン、カジュ、部落でバナナが豊富であったので救われた。時期的に乾季であったのがよかっただけで、果物は全く期待していけないのが賢明であろう。

以下に持ち込んだ食糧リストを掲げるとともに、それに対する若干の考察を試みた。また活動中のメニューも付しておく。

#### 食糧リスト（1972年9月～12月分の計画）

|   |      |                                         |
|---|------|-----------------------------------------|
| 米 | 10kg | 炊くとバラバラになり「ご飯」以外の用途を考へるべきで、スープの種、お粥に適す。 |
|---|------|-----------------------------------------|

## ビスケット類

50包

いかなる所でも重宝なもので、特にその甘さは貴重である。

## スパゲティ

20包

アマゾン地方では米について食されており、また安価でもある。

## スープ類

30包

ブラジルはネッスルが大きくマギー、またクノールもあり、下痢の際などの病人食として極めて簡便。

## イワシ油漬カン詰

100包

これはFUNAIに食べさせてもらうのばかりは悪いというので持ち込んだものである。ほとんどがFUNAIとそのポストに消えた。これとファリーナのあえものは非常に美味かつ簡便。

## 即席みそ汁

5袋

このほか、日本食品はマナウスでも、高いが市販されている。ラーメン、しょうゆ、のりのつくだにetc。

## 調味料として

ケチャップ、唐がらし、コショウ、塩、砂糖、にんにく

調味料は旅行が長くなると色々そろえたいものだ、とつくづく考える。また砂糖は余計に

## 嗜好品として

ネス・カフェ、紅茶、日本茶、練乳

持ってゆくべきである。

練乳を1日中なめていた隊員もあり、甘みと茶の苦味は憩にはなくてはならない。

## 煙草

紙巻10カートン(うち日本製2カートン)

棒タバコ 5cm $\phi$ ×150cm

日本からもっていったものは湿気てしまい、まさに名前だけで吸っていた感あり。また棒状にきつく巻いた長大な煙草は独特のもので、ナイフで刻み、紙に巻いて吸う。非常に強い。またこれはインディオとの交換物資ともなり、紙巻きはFUNAIに半分与えた。

## 食事メニュー

〔旅行中〕

米

ファリーナ

スパゲティ

フェジョアータ

最も標準的なアマゾン地方の献立。

ファリーナ

魚スープ

要するに魚をぶつ切りにして塩水で煮いただけのものにファリーナを溶かして食べる。鳥獣類も同様にして食す。

タピオカ(マン  
ジョーカ澱粉)  
カフェ

タピオカはちょうど昆  
布茶に入るおかきのよ  
うな体裁をしており、  
コーヒーに溶かしなが  
ら食す。最も苦しい一  
食。

ファリーナ  
カメ煮  
カメ焼

カメはアクが強いので  
一度熱湯に入れアク抜  
き。あとは魚と同じく  
塩水で煮く。焼く方は  
カメの背の甲らを火の  
上に置き、甲らの内に  
ついている肉を焼く。

焼ピラニア  
カメ卵

〔部落定着中〕

イモ粥  
さとうきび  
バナナ  
ポタージュ

ビスケット  
インスタントコーヒー  
さつまいも  
卵

バク  
ファリーナ

(津田)

## 医 療

学生だけの隊として最大の弱点が医療班である。その対策として、医学ハンドブック程度の知識と、実際に使用する各薬品の近視眼的知識を吸収したのである。しかし、そのような貧弱なものでは、本にのっていない、また経験もしたことの無い症状には手のほどしようがなく、逆に粗末な医療知識をこねまわし、悪い結果を引き起こすことも考えられる。

**隊員の病気** まず報告しなければならな  
いことは、津田隊員(医療係)が調査旅行(9  
月29日～12月2日)中に急性リューマチ炎  
(後の病院の診察による)にかかったというも  
のである。

旅行のはじまる前から、全身のだるさと、肩  
ひざ等にぎこちなさを感じていたのであるが、  
船での旅行が始まって1週間、首、背中の筋肉  
股関節に痛みを覚え、2週間で痛みはヒジ、手

首、指の関節におよび、ヒザは腫れあがった。  
この時点で体を動かすことは極めて困難になる。  
昼は酷暑のカヌーの上で、夜はハンモックの中  
でじっとしていてもうずくこともあった。それ  
までに手持りの鎮痛剤、アリナミン、クロロキ  
ン、抗生物質をあれこれと手当たり次第に服用す  
るのであるが、いっこうに目に見えた効果はあ  
がらなかった。この時、慢性の下痢により、身  
体もかなり衰弱し効能成分の吸収力も劣ってい  
たと思われる。

ここで悔まれたのが注射技術を知らないこと  
であった。ペニシリンを2回ほど射ったのであ  
るが身についていないということは悲しく、常  
用できないし、またひとりではとてもできな  
かった。

結局、前後3カ月、うち1週間の歩行困難の  
のちに一応痛みはひいたのである。